りびんぐらいぶず　平成二十一（二００九）年三月第二号

智慧の光明はかりなし

ご讃題

智慧の光明はかりなし　有量（うりょう）の諸相ことごとく

光暁（こうきょう）かぶらぬものはなし　真実明に帰命せよ

（浄土和讃第四首、讃阿弥陀仏偈讃第二首　注釈版聖典 P557）

一、ご和讃のお心

ご讃題のご和讃は、浄土和讃は『讃阿弥陀仏偈和讃』の第二首であり、曇鸞大師の『讃阿弥陀仏偈』をご讃歎になった御歌であります。

和讃に対応する『讃阿弥陀仏偈』にはどのように表現されていたかと申しますと、まず、「南無阿弥陀仏」と帰命（きみょう）された上で

「智慧の光明量（はか）るべからず。

ゆゑに、阿弥陀仏をまた無量光（仏）と号（なづ）けたてまつる。

有量の諸相光暁を蒙（こうむ）る。

このゆゑに真実明を稽首（けいしゅ）したてまつる」とあります。

はじめに、語彙を抑えてみますと

「智慧の光明」とは、阿弥陀如来（またはお名号）のお徳を十二の光でお讃えになったその一つであります。

「有量の諸相」とは、「よろづの衆生なり」とのご左訓からみてあらゆる衆生のことであり、

「光暁」とは、仏の光明が無明の闇を破ることを暁の光に喩えたものであります。

「真実明」とは、まず「明」は智慧の意でありますので、真実の智慧で十方世界を照らす仏という意味であります。

「稽首（けいしゅ）」とは、膝まずいて頭を地につける礼拝法を指します。

「帰命」とは、阿弥陀仏の帰せよの命（本願招喚の勅命）に従いなさい（Ref　ご本典「六字釈」註釈版　P170）という如来様の仰せにお任せする（信順する）ことであります（Ref「尊号真像銘文」註釈版 P651）。

以上を踏まえてこの和讃のお心を訪ねてみることにしますと、

「阿弥陀如来の智慧の光明ははかり知ることができません。

有限の存在にすぎないあらゆる有情は、どんな姿形にあろうとも、その無明の闇をことごとく打ち破って下さる智慧の光明の優れた働き｛照用（しょうゆう）｝を被らないものはありません。

その有様は、丁度、暁の日の光が夜の闇を一瞬にして打ち破るようなものであります。

それゆゑ、無明の闇の中にまどろんでいる一切の有情は、真実の智慧で十方の世界を照らして下さる阿弥陀仏の仰せに呼び覚まされて、仰せの通りにお任せなさいませよ」となろうかと思われます。

二、弥陀如来名号徳に聞く

十二光については、ご開山が八十八歳の年の暮に著された『弥陀如来名号徳』に、「智慧光」のおいわれについてさらに詳しく説いていて下さいます。原文の言葉を離れることのないように注意を払いつつ、言葉を補いつつ現代語で表現すると次のようになろうかと思われます。

「智慧光」というのは、(法蔵菩薩が) 無痴 (むち) の善根をもって獲得なさったひかりであります。

「無痴の善根」といふは、愚痴の心がないことを言い、法蔵菩薩が御本願の完成をめざして兆歳永劫の修業をなさるときには、一念一刹那たりとて愚痴の心がなかったことを表しています。

かくして清らかなその御修行の結果獲得された「無痴の善根」は、何故に獲得されたのかというと、自らは愚痴の生死海に沈んで決して浮かび上がることの叶わない一切有情に法蔵菩薩が獲得された「無痴の善根」を回施することによって、一切有情をして智慧を習い学んで無上菩提に至らんとおもふこころをおこさしめようとされたからだというのです。

そしてそれには、自力の修行の叶わない一切有情に対してご本願叶って阿弥陀如来のお手元で仕上げて下さったお名号を回施し、如来の仰せのとおりにお名号を称するこころ (これを「念仏を信ずるこころ」と申します) を得させようというのであります。

「念仏を信ずる」というのは、そのまま如来より賜る智慧を得て仏となるべき身と定まること(正定聚)にほかありませんから、それは三毒の煩悩の一つである愚痴を離れることをいうのだと知られるのであります。

そういうわけだから、智慧光仏というのだと仰せであります。合掌。

(あとがき)

もう十三年も前にまだまだこれからご法義のためには自坊を支えてもらわなくてはならないと杖とも柱とも期待されていた叔父が癌の闘病の末亡くなりました。六十三歳でありました。

叔父は、大変熱心に自坊で仏法弘通のために尽力を払いました。

今でも思い起こすのは、手作りの提灯を作ってそのおのおのに十二光の名を付し、ご法座の度ごとに、子供たちが献灯、伝供の用に付していたことであります。

既に叔父の享年を遥かに超え来たった今、こうして阿弥陀如来の十二光のお徳をお讃えする御文をお訪ねするとき、あのときの素朴な手作りの十二光の提灯の面影が甦って参ることであります。合掌 (玄宥記)

◆正覚寺仏教壮年会例会　毎月第一日曜午後八時より
◆正覚寺仏教婦人会例会　毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元　りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派　正覚寺内)
〒五二０－０五０一大津市北小松四五二番地　☎＆Fax　０七七－五九六－０一六六
ﾒｰﾙ　mhkatata@pluto.dti.ne.jp　　使務　堅田玄宥